

一宮市 博物館 だより

もくじ

展覧会のご案内

- 市制90周年記念特別展「絹谷幸二展」・・・ 2
- 企画展「暮らしの中の民具～竹細工」・・・ 3
- 研究ノート・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 歴史探訪・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 博物館アルバム(平成23年度上半期)・・・・ 7
- 平成23年度催し物のご案内・・・・・・・ 8

No.48 2011.10



あやなすまち一宮 ひと ひと ひとつもよう 部分(絹谷幸二/アフレスコ壁画/一宮市博物館エントランス)

絹谷幸二展

平成23年10月8日(土)～11月27日(日)

【休館日】10月11日(火)・17日(月)・24日(月)・31日(月)、11月4日(金)・7日(月)・14日(月)・21日(月)・24日(木)

【観覧料】一般500円(400円)、高・大学生300円(240円)、小・中学生200円(160円)

※()内は20名以上の団体料金



プリズムの街ヴェネツィア・美しき夜明け(個人蔵)

昭和六十二年、一宮市博物館の開館にあわせ当館のエントランスには「あやなすまち一宮 ひと ひと ひともうよう」と題されたアフレスコ壁画が描かれました。この全長二十二メートル余に及ぶ作品は一宮の地を、またそこに住むひとをひとつにし、この地のさまざまありようをあらわしています。

作者の絹谷幸二氏は、昭和十八年奈良市に生まれ、東京藝術大学油画科小磯良平教室で学び卒業、同大学院では壁画を専攻し修了。二十五歳で同大学副手になるとともに、独立美術協会の会員になりました。その後二十七歳でイタリアに渡り、壁画の勉強を続け、アフレスコ画技法などを習得します。帰国後、日本大学芸術学部、多摩美術大学美術学部をへて、昭和六十二年からは東京藝術大学で後進の指導にあたり、平成十三年日本芸術院会員となり、現在の日本の洋画界の牽引者であります。絹谷氏は、祈り、天、祝祭など自然、文明や人間について、ご自身の強い思いが常にあり、その思索の発露が作品に込められて、同時代を記録するとともに、未来への思いがメッセージとして強く発信されています。



空中円転(個人蔵)



ラポニア(夢の時)(個人蔵)

今回の展覧会は、一宮市制九十周年記念の特別展とし、絹谷氏の初期「自画像」、「蒼の間隙」といった昭和四十一年の東京藝術大学卒業制作作品から、イタリア留学を経て、現在にいたるまでの代表作五十点の平面、立体作品を展示し、その創り出す魅力、思いをご覧いただけます。

●美術鼎談

会期中の十月三十日(日)午後一時三十分からは、絹谷幸二氏と愛知芸術文化センター総長の神田眞秋氏、妙興報恩禪寺住職の稲垣宗久氏による「美術鼎談」を博物館に隣接する妙興報恩禪寺客殿にて開催します。

●ギャラリートーク

また、絹谷幸二氏によるギャラリートークも十月八日(土)・十六日(日)の午後一時から開催し、ご本人による作品への思い、制作当時の背景などを語っていただきます。(伊藤和彦)

アフレスコ技法とは

アフレスコ(フレスコ)画技法は、画面に絵具や顔料を定着させるための溶剤は使いません。湿った漆喰(石灰モルタル)の上に水性の顔料を乗せて、彩色をします。短い時間に漆喰の石灰分の細かな粒子が顔料を覆い、空気中の二酸化炭素と反応して透明なガラスのような皮膜に包まれます。顔料はこの皮膜に閉じ込められており、永遠に美しい色彩を保ち続けるのです。ジョットの壁画やミケランジェロの「最後の審判」もフレスコ画の技法を用いた作品です。

〈企画展〉

暮らしの中の民具～竹細工

平成24年1月7日(土)～2月26日(日)

【休館日】1月10日(火)・16日(月)・23日(月)・30日(月)、2月6日(月)・13日(月)・20日(月)

【観覧料】一般200円(100円)、高・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)

※()内は20名以上の団体料金

コメアゲ(イカキ)をつくる



①ハチクを割る



②ヒゴコキを使う



③編み上げる

瀬部 尾関克己さん

平成三年度より始まった、歴史を学び始める子どもたちのための「くらしの道具」展。二十回目となる今年度からは、「くらしの道具」全般を展示するとともに、道具の中からテーマを一つ選び、歴史の中での位置付けを紹介していきます。

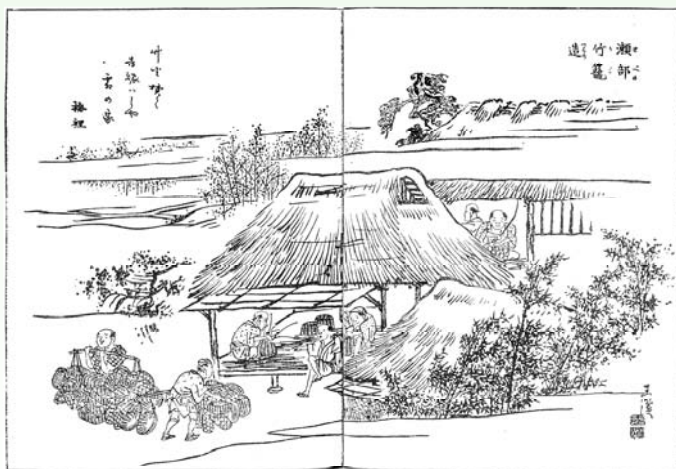
また、竹を加工するための金属器の発達も重要で、遺跡から出土している各時代のカゴを、素材や形、大きさを念頭に観察すると、面白い発見があります。

さらに、一宮市瀬部は、『尾張名所図会』に「竹籠を作り売り歩く様子」が描かれるほどの、近代までは竹細工の産地として著名でした。木曾川の猿尾も瀬部の人々の手による蛇籠で造られており、広くその名が知られていたのです。しかし、今ではその伝統も途絶え、伝承者もいないのが現状です。

このように、長い歴史の中で変遷し、さらにプラスチックやステンレスに取って代わられてしまった竹細工。今回はこの竹細工に焦点をあて、カゴやザルの歴史を紐解き、近現代に農家の副業として発展していった姿を瀬部の竹細工とともに考えたいと思います。(久保禎子)

期間中の催しもの

- 1月8日(日) 午前10時～12時/午後1時～3時
竹で遊ぶ～子どものためのワークショップ
- 1月15日(日) 午後1時～3時
講演会…暮らしの中の竹細工について
講師/武蔵野美術大学非常勤講師 工藤員功氏
- 1月22日(日) 午後1時～3時
講演会…カゴ細工の歴史について
講師/名古屋大学文学部名誉教授 渡辺誠氏
- 1月29日(日) 午前10時～12時/午後1時～3時
竹細工の実演とワークショップ



瀬部竹籠造(『尾張名所図会 後編 卷六』より)

尾西の織物業

前一宮市文化財保護審議会委員 鈴木 貴詞

尾西地域は愛知県西部にあり、二宮市、稲沢市から津島地域にかけて織物を製織する工場及び、それに関連する紡績、撚糸、補修、染色整理の各業種の工場がある繊維工業地帯として知られていて、各市、町、村々を歩くとノコギリ屋根工場が見られ織機の音が聞こえてきた。しかし、現在は時々織機の音が聞こえる程で、静かなノコギリ屋根の工場が物置等として利用されている。

昭和二十三年頃のある日の午後のことである。「こんちわあ、ごさまあ、いやあ、すきやあ。」と言いながら門から入ってきて、縁側で縫物をしている祖母を見て「やととかめやなも、ごさまもおげんき。」と話しかけ、祖母も「よう、やととかめやなあ。」と言ひ、「今日採ったなばやで、たへてちよ。」と縁側に腰掛けて言いながら、籠から野菜やコウセキウリを出しながら二人で楽しそうに話をしていた。訪ねてきたのは、昭和の初めの頃に働いていた近くの村の農家の娘さんだった。

工場の食事の野菜は、工場の畑(農家の人が来て耕作)や農家の野菜、八百屋から買った野菜などで調理された。農家で作られ、買入れた野菜の肥料は従業員などの排泄物利用され、一荷いくらで売られた(大正二年①十八荷三円三十三銭②三十三荷二円六十八銭)。また、できた野菜は工場で買い、調理に利用した。

一日の就業時間は戦前は十二時間で(午前五時半より午後七時半まで)、食事は賤い方が調理し、三食で食事時間は各一時間(朝食)で、夕食は午後七時半以後で、午後三時から四時頃に十五分間の休憩があった。休日は月二回で、二週間置きだった。

食費は、明治三十六年七銭／一日、大正元年九銭／一日、大正九年十銭／一日、大正十二年十・七

銭／一日、昭和四年十二・二銭／一日で、給料から差し引かれた。

従業員の独身者(男女共)は全員寄宿舎生活で、寄宿舎は二人当たり二畳で約一部屋十〜十二畳五〜六人で部屋長が新人などの面倒を見た。また、家庭持ちが工場の近くの借家か工場の社宅に住み、通勤だった。

工場の年中行事として、午後から臨時休業し食事をしながら秋の祭り(恵比寿講・忘年会の一種)の懇親会が催された。その時に、出身地の唄や機織り唄などが歌われた。

毎年五月には寄宿舎の大掃除があり、大正末頃より翌日には運動会をしたり、芝居や活動写真を観に行ったりであった。

明治三十三年頃に、県庁より工場の衛生や従業員の健康に関する通達があった。明治より大正の初め頃にかけての従業員の出身地及び人員は表1・表2、表3は大正元年及び大正二年の年齢構成である。三重県の員弁郡が多く、愛知県、岐阜県等より来ている。募集は縁故や周旋人(口入れ屋)によった。幡豆郡については木綿産地のためと思われ、山形県は明治四十三年に愛知県織物同業組合工女募集によるもので、年契約三年、支援金十六円、年明け三十円の報酬との契約だった(山形県の労働者募集事務所の仲介による)。

当地方は織物工場が多く、男子や女子の引き抜きがあったりして、労働管理やその他のいろいろな事でも苦勞したようである。

工場では正月休(二月)、盆休(八月)に四〜五日間の休みがあり、従業員はそれぞれの故郷へ帰った。帰宅しない者も居り、各自一円程の小遣い等を渡した。男(二十才以上)は募集を兼ねながら女子従

(表1)明治後期の(大正初期)にかけての従業員の出身地及び人員(鈴鹿織工場の工女名簿、職工人名簿、總務簿等より)(内は男子)

出身地	明治36年 9月~1月	明治41年 9月~1月	大正元年 12月15日	大正2年 (前期)	大正2年 (後期)
愛知県	中島郡 8	7	10	8	11
	知多郡 9	11	3		2
	幡豆郡 30	12	7	7	6
	額田郡 1				
	碧島郡 9	6			
	名古屋市 1			1	
岐阜県	安八郡 1	1	11(4)	5(1)	11
	羽島郡 3		6	4	6
	海津郡 1	1	8	17	27
	養老郡 3	4	7(1)	6	6
	本巣郡 1		11	12	23
	稲葉郡 1		(1)		
	山県郡 1				6
	郡上郡 1				
	武儀郡 2				
三重県	員弁郡 33	42	41(6)	48	38
	犬上郡 1	1	14	18	16
滋賀県				3	
福井県					
山形県				1	
				1	
				1	
				2	
				1	

(表2)大正9年、15年、昭和2年の出身地

出身地	大正9年	大正15年	昭和2年
愛知県	幡豆郡(西尾町) 一宮市 中島郡(朝日村)起町(片原色下(中島村)) 犬上郡(高倉村)	幡豆郡(西尾町) 一宮市 中島郡(朝日村)起町(片原色下(中島村)) 犬上郡(高倉村)	幡豆郡(西尾町) 一宮市 中島郡(朝日村)起町(片原色下(中島村)) 犬上郡(高倉村)
三重県	安濃郡(安濃村) 河津郡(桑本村) 員弁郡(山郷村)中郷村、十社村、東藤原村、発田村、中里村	安濃郡(安濃村) 河津郡(桑本村) 員弁郡(山郷村)中郷村、十社村、東藤原村、発田村、中里村	安濃郡(安濃村) 河津郡(桑本村) 員弁郡(山郷村)中郷村、十社村、東藤原村、発田村、中里村
岐阜県	本巣郡(本巣村) 山県郡(春井村)山県村、殿美村 大垣市	本巣郡(本巣村) 山県郡(春井村)山県村、殿美村 大垣市	本巣郡(本巣村) 山県郡(春井村)山県村、殿美村 大垣市
滋賀県	草津郡(富岡村)上井田村、北山村、富士原村	草津郡(富岡村)上井田村、北山村、富士原村	草津郡(富岡村)上井田村、北山村、富士原村

(表3)大正元年12月の男子の年齢構成

年齢(才)	大正元年 12月	大正2年 前期	大正2年 後期
12	2	0	6
13	1	5	5
14	3	9	9
15	0	15	10
16	2	8	18
17	1	22	16
18	0	17	5
19	0	21	12
20	2	22	5
21	1	23	7
22	1	24	0
23	1	25	2
24	2	26	1
25	1	27	1
26	0	28	2
27	1	29	0
28	0	30	0
29	1	31	0
30	2	32	0
31	1	33	0
32	1	34	0
33	1	35	0
34	1	36	1
35	1	不明	1
36	1		
不明	4		10

業員の家に出かけ休み明けには工場に帰るよう、また新しい人を頼むために家々を訪問した。その時には、工場及び、従業員の出身地の警察署に年月日と目的を書いた書類を提出した。明治期の労働者は過酷な労働状態のもとで働いており、いろいろなことが起こっており、労働条件の改善のために明治四十四年三月に工場法が成立し、大正五年九月に施行された。大正元年十二月は、工女の出身地、年齢、親の名前等を記載した労働調査表を一宮の警察署に提出した。工場法は就業年齢、労働時間や労働環境、衛生面等について記載されており、管理は警察にてされたようである。警察署(愛知県)の中に工場課があり労働調査表は警察に提出された。労働調査には職工名簿や賄部のなどの調査表が提出され、就業時間、休日に関する表や、その変更の場合には届け出が必要であり、また職工の業務上の負傷、病気や死亡したときの規則すなわち職工扶助規則が大正十五年より実施された。

給料は、手織りのときは織物によつて一反織るといくらでと精算された。すなわち、都浮織二十銭・本セル二十一銭・片セル十七銭・羊毛コート三十三銭(明治四十二年)、本セル二十一銭・本セル崩三十銭・セル袴立十五銭・セル袴崩二十五銭・片セル立十六銭(大正五年)で月々の製織反数に掛けられた。大正時代の力織機の場合は、本立一銭五厘／ヤール、A英ネルに二銭一厘／ヤール、カルゼ一七銭／ヤールで一ヤールについての単価である(大正七年)。また、月賞が一カ月の製織反数により渡された(手織り三十五反、二十五銭、四十五反四十五銭、五十五反六十銭、六十五反一円、七十五反一円三十銭、動力の場合は十反を五反として計算(大正六年))。すなわち、手織りの場合は織物により一反当た

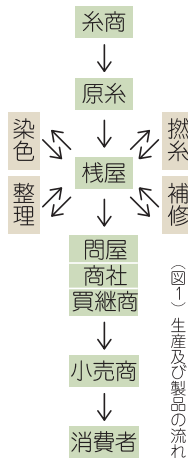
りの単価で、動力織機の場合は一日の織の長さ即ちヤール当たりの単価で計算された。

皆勤賞は盆、正月二日分出され、勤務年数により三年には布団、五年で箆笥一棹、賞与は年二回各個人により違い着物などが多く、給料の一カ月分程度が渡された。

男子は故郷に帰って家業に就くか、工場の仕事に従事したりまたは独立して機屋を経営したり、また女子は故郷または就職先で結婚する場合もあった。女子の場合、故郷で家庭を持った場合には工場の賃機として織物を織った。

工場での機仕掛けや準備により機織りの仕事や準備関係の仕事のないときには、いづれについて布団作りなどの裁縫を習ったりした。工場の生活は楽しいこともあれば悲しい時もあり、そのときはいづれが面倒をみた。

織物の生産及び製品の流れは図1である。



原糸は地元及び関東、関西の糸商や商社より買った。糸は使用する織物により、綿糸、絹糸、柞蚕糸、梳毛糸または紡毛糸等を仕入れた。明治末より大正時代に織られたセル(着尺)の梳毛糸は生地で、または霜降糸が使われ、大正初期には霜降糸が盛んに使われた。霜降糸はほとんどが輸入糸で商社よりの見本の中から必要な糸を注文して買ったようである。問屋、商社、買継商から織物の注文をもらい、見本を分解して必要量ずつ染めてもらうため染色屋に生地糸を渡して染めてもらい、染めた糸は撚糸する場合は撚糸屋へ、他の糸は機屋でそれぞれ下準備をして機に仕掛けて製織した。織られた織物は検査して整理屋に整理するために渡した。整理は明治期には仕上げをしていたが、明治末頃

より毛織物が生産されるようになり、設備が機械化されいろいろな仕上げ用の機械が設置され毛織物が整理されるようになった。大正時代には仕上げがった反物を文庫仕立にしたり厚紙の棒に巻いて出荷した。文庫仕立は反物を三センチくらいの板に巻いて、巻き終わったら板を取り、糸で綴じて商標を入れて厚紙で包んだ。仕立はそれ専門の職人が各工場と契約して、行つて作業した。また、整理工場でも作業した。

反物を浜紙と油紙で包み藁で衣装したり、又箱詰めにして送った。輸送は一宮駅より汽車便で関東・関西方面の問屋や商社に送った。汽車の無いときは荷馬車または馬を利用及び船を利用した。地元の見継商人へは荷を大八車に乗せて各店へ運んだのである。問屋からは地方の商店へ、それから消費者に渡った。

注文をとるときは榊見本を製織して問屋に見せてから注文をもらうのだが、榊見本は当地方は多品種少量生産で織物は柄物中心のため、柄すなわち意匠は売行に関係するため工場では柄師(意匠専門の男子工員)が見本を問屋からの意向や流行等を考えながら作った。織巾を経方向に等分に分割して、一分割毎に柄の地色や筋糸を変えて経配列し目的の組織で、緯糸を変えて織る。見本は柄目状になり全体を問屋に見せてその中から抜き出された柄で注文をもらうのである(写真/セルの榊見本帖)。そのような見本は組織の変化と柄の研究をするために明治の中頃頃より研究されていた。



セルの榊見本帖

また、注文は関西または関東の問屋が明治大正の頃には当方に出向いてこれら、離座敷で一泊して、現在の流行や色柄、前によく売

れた織物等につきいろいろと話を聞き、注文を頂いたものである。織物の生産は機屋及びその機屋の下請工場や製織設備を持たずに外注工場で、また機屋の自家織物と他の工場の下請をしている工場があった。下請工場は明治期には近在の農家等に織機等一式を貸して製織してもらった。募集を兼ねながら以前に働きに来ていた家へ頼む場合もあった。それは織りをよく知っていて追加注文等の場合の良い製品を織ってもらうためである。支払工賃は織物品物によって一反いくらかの基準があつて支払った。力織機の場合は一ヤールあたりの単価が定まっています、それにより支払ったようである。

補修は織物を検査し、糸切れや結目等の処理をする作業で綿掃除とも言ひ、明治末頃にはしていたよう、縞の疵等の欠点について注意を払い良い製品を心掛けていた。

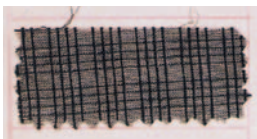
織機は手織で織物が生産されていて、明治末頃に一宮で動力織機が導入された様だが、旧尾西市の三条地区は大正三年に電気が、動力用の電気は大正五年からである。それにより織機の導入が始まり、ジョージホリスンやグロンセンハイナ等の外国織機や国産の平岩や天満小森等の織機が設置された。写真は明治時代に織られたセル着尺地である。セルは明治末頃より盛んに織られ、明治期は手織機で織られていた。セルは毛織物で合着として着られた。セルは大正時代には着尺セルとして力織機で盛んに織られた。毛織物のセルは明治十八年頃に当地の加藤平四郎氏、酒井利一郎氏が三井物産から糸糸を購入し、織られたが成功しなかった。その後、明治三十四年の研究の結果片岡氏が着尺セルに成功された。片岡氏は当時ドイツから輸入されたセルヂスを着尺用に利用できなかったと着眼されて研究されたが思う様にかず、機械の改良や特に仕上げに力を注がれていろいろ苦心研究の末、明治三十六年第五回内国勸業博覧会に出品されて入賞された。その後、当地でもそれによりセルヂスを製織するようになり、整理の機械等を外国等より輸入設備さ

れてセルの生産量が増加していった。セルには、本セル、片セル等があり、綿セル、絹セル、筋糸には絹糸や人絹糸等を入れたセルがある。大正七年頃には洋服地が織られるようになり、大正十二年に裕用としてウールラインが生産された。その後年々生産量も増してきたが、大正九年の不況と外国からの安い輸入品により当地の機屋は苦境に陥り、そのため同業者が集まり大正十二年四巾織物研究会が設置された。会員は織物関係は勿論のこと、あらゆる各種の業者が集まり、技術の向上と品質の改善のために力を注いだ。その後、展覧会等に出品したりして研究し、努力の結果各種背広地等の毛織物の品質が向上し盛んに生産された。

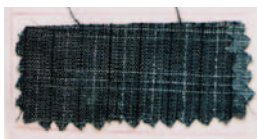
当地の毛織物の生産地としての基は着尺セルによるのであつて江戸時代は綿織物、明治時代は絹綿交織物、大正時代は着尺セル(毛織物)、昭和時代は洋服地で柄物中心の多品種少量生産であり、各時代とも好・不況等の経済的な事やその他技術的な事がいろいろあつたが、そのたび毎に当時の人々は困難を乗り越えてきて今日尾西地域の織物業がある。

参考文献

- 「尾西織物案内」一九二七・一九二九
- 「片岡毛織創業九十年史」一九八八



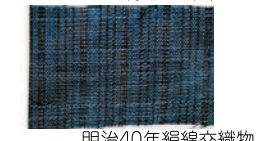
明治44年本セル



明治44年片セル



明治43年都



明治40年絹綿交織物



大正3年本セル

歴史探訪

妙興寺観音堂を訪ねて

今回は、博物館の南西角に建っている観音堂を訪ねてみました。

残念ながら観音堂の詳しい由緒はわかりませんが、尾張藩が寛文中（二六七〇年前後）に編纂した村勢調査「寛文村々覚書」中島郡妙興寺村の項に「一 観音堂 十王堂 式ヶ所 地内三畝歩 前々除」とあります（『名古屋叢書統編』第二巻）。この記録によれば、寛文中中の妙興寺村には、観音堂と十王堂の二つのお堂が存立していました。しかし、創建年代はわかりませんが、「前々除」（慶長十三年（一六〇八）の備前検以前からの除地）とあることから、この二つのお堂は、すでに慶長以前に建てられていた可能性があります。

また、寛政四年（一七九二）から文政五年（一八二二）にわたり編纂された「尾張御行記」中島郡妙興寺村の項によると、「一 観音堂 宇耕雲庵控、地内二十歩前々除、添地一畝歩 仏供田四畝歩村除也、草創ノ由来不詳」とあります（『名古屋叢書統編』第六巻）。この頃になると、妙興寺塔頭の耕雲庵（耕雲院が、観音堂を管理するようになったようです。しかし、いずれにしても、これら二つの記録から

は、当時、観音堂に何が安置されていたのかを窺い知ることは出来ません。

さて今日の堂内には、厨子の中に、如意輪観音菩薩坐像が安置されています。この如意輪観音は、洪水の際に宮地花池村からこの地に流れ着いたと伝えられています。如意輪観音の制作年代はわかりませんが、明治二十七年（一八九四）に修復したことを伝える棟札があります。この棟札によると、明治二十四年の濃尾震災の際に如意輪観音が破損し、村中の有志が修復費用を出し合って、名古屋鉄砲町の仏師に頼み修復したそうです。

また厨子の両脇には、雛壇上に西国観音霊場の石仏（本尊仏）が安置されていますが、当初の観音堂には、観世音菩薩像（当初から如意輪観音であったかは不明）だけが安置されていたと考えられます。

例えば、明和六年（一七六九）に成立した「張府年中行事附録」には、尾張三十三所観音について「是西国三十三所の順札に准じて参詣す」とあるように、この頃から民衆の間で観音霊場の巡礼が定着し、習俗として、盛んになっていたようです（『名古屋叢書三編』第八巻）。

また江戸時代の尾張藩士高力種信が書いた日記「猿猴庵日記」から名古屋城下に限って見るならば、安永四年（一七七五）に名古屋七ツ寺で三十三観音堂の上棟が行われたことや、天明三年（一七八三）に名古屋誓願寺で谷汲観音の開帳がなされたことなど、西国観音

霊場に関わる事柄が安永四年から文政三年（一八二〇）にかけて記されています（『名古屋叢書三編』第十四巻）。特に、文化十年（一八一三）、文化十四年、文政二・三年の日記には、三十三観音の入仏供養や建立開帳について記され、十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて、名古屋では西国観音霊場の写し霊場が盛んに形成されていたことがわかります。これらのことを踏まえ考えると、観音堂に安置されている西国観音霊場の石仏も十八世紀後半以降に安置されたと考えられます（現在のところ年号などは不明）。

ところで、観音堂の前には、常夜燈と南無阿弥陀仏と彫られた石塔があります。常夜燈の年代はわかりませんが、南無阿弥陀仏の石塔は、明和六年（一七六九）に彫られたことがわかります。

何故観音堂の前に、南無阿弥陀仏の石塔があるのかと疑問に思われるでしょう。阿弥陀と観音の関係といえば、阿弥陀三尊の脇仏として観世音菩薩、勢至菩薩の姿を思い浮かべます。観世音菩薩は慈悲の面、勢至菩薩は知恵の面として、阿弥陀の働きを助けます。また観世音菩薩の慈



妙興寺観音堂
（大和町妙興寺宇西之口）



明治17年地籍図（愛知県公文書館蔵）



妙興寺模型
（江戸時代の妙興寺を再現した模型 一宮市博物館蔵）

また堂内の天井には、花鳥風月の天井絵が描かれています。それは極楽浄土を意味しているのかも知れません。（石黒智教）
〈謝辞〉本稿を作成するにあたり、ご協力を頂いた小林真郎・則子・美津子氏に感謝します。

平成23年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

特別展

市制90周年記念 **絹合幸二展**

▼10月8日(土)～11月27日(日)

企画展

2011一宮市現代作家美術秀選展

▼12月3日(土)～18日(日)

第69回一宮市美術展の成果を受けて、一宮市美術展依頼出品者、市長賞受賞者、一宮市美術作家協会・宮書道協会・一宮写真協会推薦者の作品を展示します。

企画展

暮らしの中の民具く竹細工

▼1月7日(土)～2月26日(日)

講座・公演

市民文化財めぐり

▼11月2日(水)

講座

尾張平野を語る16

▼2月5日(日)・12日(日)・19日(日)

16回目となる今回は、「歴史学と博物館く尾張から発信する」をテーマに、尾張平野の歴史を考えます。

公演

民俗芸能公演

▼2月26日(日) 13時30分より

【五堂記念木曾川図書館にて博物館収蔵品展を開催】

画家は旅する～一宮ゆかりの画家たち～

平成23年10月22日(土)～11月17日(木)

一宮市木曾川町出身の川合玉堂(1873-1957)は、日本各地へのスケッチ旅行を通して自然に学び、新しい日本の風景画を描きました。「旅」は画家にとって新たな画題を求めるとともに、時に画風の転換点となるような重要な意味を持ちます。今回の展覧会では「旅」をテーマに、一宮市所蔵の川合玉堂、土田麦僊、棟方志功らが描いた一宮ゆかりの作品を展示します。秋の行楽日和、画家が旅先で描いた素描や旅にまつわる物語絵などを通して、アートの世界を旅してみるのはいかがでしょうか。



川合玉堂《海辺晩秋》一宮市博物館蔵



土田麦僊《美人草に鳩》一宮市博物館蔵



棟方志功《大和し美し 建命の柵》一宮市博物館蔵

学芸員による展示説明

- 日時／10月29日(土)、11月3日(木・祝)、13日(日)
※各回とも午後2時から
- 定員／なし ●申込／不要

玉堂記念木曾川図書館 〒493-0007 一宮市木曾川町外割田字西郷中25 TEL 0586-84-2346 FAX 0586-85-0480

【開館時間】午前10時～午後6時 【観覧料】無料 【休館日】10月24日(月)・31日(月)、11月4日(金)・7日(月)・14日(月)

【交通】名鉄名古屋本線「新木曾川駅」下車西へ徒歩約15分、または西尾張中央道「外割田」交差点を西へ約100m

一宮市
博物館
だより

第48号

発行日／平成23年10月8日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／三井堂株式会社

利用案内

- 【休館日】毎週月曜日、休日の翌日
- 【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
- 【観覧料】(常設展・聴講料含む)一般200円(160円)、高校・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)
※()内は20人以上の団体料金
※一宮市内小・中学生は無料
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215 FAX0586-46-3216
URL <http://www.icm-jp.com/>



【交通】名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分